

英語圏ナショナリズム論のなかのウェールズ

—1983年のネイション、そして〈個人〉¹⁾—

大 貫 隆 史

I ウェールズ——「地域」と「国」の緊張感

イギリスのなかでも、スコットランド、北アイルランド、ウェールズは、いわゆる「ケルト周縁 (Celtic Fringe)」²⁾ として総称されることがある地域もしくは国である。「地域もしくは国」というのは、この三つの場所を、そのどちらで呼ぶのかで意味合いがかなり変わってしまうためである。「^{リージョン}地域」という言葉を選ぶとき、そこでは暗黙にではあれ、スコットランド、北アイルランド、ウェールズを「ネイション」(民族、国民、国)と呼ぶことが回避されることになるし、逆に「^{ネイション}国」と呼ぶのであれば、「^{イギリス}連合王国」という枠組みへの懐疑が場合によっては公然と示されることになる。

言い換えると、この三つを「ネイション」と呼ぶ人びとと、それを回避する人びとのあいだに容易ならざる緊張感が走っている、ということになるの

- 1) 本稿は、関西学院大学商学部教授研究会(2014年6月25日)における報告「レイモンド・ウィリアムズとウェールズ文化——「諸民族の文化」と『ブラック・マウンテンズの人々』をめぐって——」の前半部分を大幅に改稿したものである。
- 2) 「ケルト周縁」とは、ゲルマン系のアングル人もしくはサクソン人と今ではいわれる人びとの襲来によって、ブリテン島の「周縁」地域に追いやられた人びとが住まう場所、という意味合いのある言葉である。想像に難くないことだが、場合によっては侮蔑的な用法にもなるし、あるいは、それを逆手にとって「ケルト周縁」諸国の連帯を喚起するような用法も出てくることになるだろう。また今日では、この「周縁」とされる場所に生きる人びとが「ケルト」民族を祖先として共有しているというのは、近代に創造された「神話」ではないかという議論も出てきている。Smith (2015) を参照。

だが、本稿では、この緊張感の正体を探る試みのひとつとして、1980年代の英語圏で活発化するナショナリズム論と、そのなかでのウェールズの位置づけを考えてみることにしたい。その際、河野による先駆的なウェールズ文化論に大きく依拠することになるのだが³⁾、本稿がいわばバトンを受け取る形で提起したいのは、ネイションと「個人」という問題である。1983年に相次いで公表され、今日に至るまで強い影響力を持ち続けるナショナリズム論を概観するとき、そこには共通の性質がひとつ浮かび上がってくることになる。ところが、ウェールズ生まれの作家・批評家レイモンド・ウィリアムズのネイション論には、そうした傾向を共有しつつも、明らかに逸脱する部分がある。本論の目的は、その逸脱を輪郭づけること、そして最終的には、それを（一見ナショナリズムとは無縁な）「個人」という鍵語に接続することである。

Ⅱ 『ウェールズの山』と文化ナショナリズム

1980年代のナショナリズム論、ならびにウェールズをめぐるナショナリズム論を具体的に見てゆく前に、補助線として参照しておきたい映画がある。それが1995年に公開された *The Englishman who went up hill but came down a mountain*（『丘をのぼったが山をおりてきたイングランド人』）であり、邦題は『ウェールズの山』とされている。さて、この映画でもっとも目を引くのは、ウェールズの村人たちが総出で「山を作る」場面、正確には、村人たちが総掛かりで、麓から頂上まで、数え切れないほど土を運び、その標高を上げようとしている場面だろう。なぜ彼らがそんなことをしているかと言えば、イングランドからやってきた陸地測量部の地図製作員たちの測量によって、村人たちの誇りである「フェノン・ガルウ」が実は山（mountain）ではなく丘（hill）だ、とされてしまったからである。英国陸地測量部（the Ordnance Survey）の基準では、山であるためには標高が1000フィート（約305メート

3) 河野（2011）

ル)以上なくてはならない。ところが、ヒュー・グラントらが扮する測量部員が計測したところ、「フェノン・ガルウ」の標高は984フィート(約300メートル)しかない。そこで村人たちは、16フィート分の土を持って、「フェノン・ガルウ」を「丘」から「山」にしようと奮闘することになる。

この映画は全般的にコメディ色が濃いものなのだが、なぜ村の人びとが、そこまで「フェノン・ガルウ」という「山」にこだわるのか、その理由が徐々に明らかにされてゆくと、徐々にシリアスな雰囲気も醸し出されてくる。ウェールズの村人たちの先祖である「ブリトン人」を、ローマ帝国、サクソン人、ヴァイキング(デーン人)、ノルマン人の襲撃から守ってくれたのが「フェノン・ガルウ」だったこと。映画は1917年に時代設定されているのだが、この第一次世界大戦の最中、村の若者たちが戦地でも、そして重要軍事物資である石炭の採掘でも命を落とすという悲劇的な状況のなか、村の誇りである「山」を、イングランド人の測量によって奪われてしまってよいのかと村人達が思っていること。こういった事情が明らかにされていくなか、ヒュー・グラント扮するイングランド人測量隊員も熱意にほだされ、再測量に応じる(つまり「丘」にのぼって「山」から降りる)ばかりか、村のウェールズ人女性と結婚するまでに至る、という物語が展開する。

とはいえ、「丘」か「山」かに、そこまでこだわる感情のあり方(村の牧師ジョーンズは病を押して「山作り」に奮闘し発作で死んでしまう)は、なかなか理解が難しい面があるのも事実だろう。つまり、どうやら経済的にも社会的にも、ウェールズがイングランドからの構造的抑圧を受けているのは分かるとしても、それに対抗するために、「山」というシンボルを持ち出してみたところで、どうしても実効性に欠けると思えてしまうためである。「フェノン・ガルウ」が「山」と認められたところで、若者が戦地や炭鉱で命を落としてしまう悲劇的な状況には、おそらく何の変化もないのではないかと、という疑問が出てきてしまう、という言い方もできる。あるいは、村人たちのナショナリズムは、いわゆる「文化ナショナリズム」であって、意味であるとか象徴であるとか、そういった部分に関わるものに過ぎず、社会的、経済

的な問題には無関係なものに過ぎない、という言い方もできるかもしれない。

Ⅲ トム・ネアンのナショナリズム論とウェールズ

しかし、そうした文化ナショナリズムが、現状では文化的なものであるのは確かだとしても、その形成プロセスをさかのぼってみると、必ずしも文化的なものとは言いがたい起源が見つかる、という主張がある。文化ナショナリズムの起源は、社会的かつ文化的なものだ、という主張とも換言できるのだが、これを以下考えてみたい。

この主張を展開した一人が、スコットランド出身の政治学者トム・ネアンである。彼は大学人というよりも、むしろ、ニューレフト（と言ってもイギリスのそれはかなりアカデミックなものだが）の論客として知られた人物であり、ウェールズのナショナリズムについて、その特徴を以下のように記述している。

歴史的にみて、強制された低開発にみられる諸特徴のおおくを、すなわち過疎化、文化的抑圧、断片的で歪められた開発といったものを、ウェールズは共有している⁴⁾。

大規模で過度に中央集権的な資本主義は、古くからの共同体のアイデンティティをむしろばんだり破壊してきたりしたのだった。これらの地域〔西欧の小規模で周縁的な共同体群ならびに地域〕が今日息を吹き返しつつあるのは、彼らの文化を回復するために戦ってきたからである——それは、基本的に「疎外」……を克服するための闘争だった⁵⁾。

「強制された低開発」には、いくつかの特徴があり、ウェールズはその特徴

4) Nairn (1977, p. 208)

5) Ibid., p. 199.

の多くを満たすとネアンは述べる。先の引用にあるように、その特徴とは、断片的で歪んだ開発・発展「人口の減少」「文化的抑圧」の三つであり、ネアンによれば、こうした特徴を強いられるに至った地域は、一見逆接的なことに、「古くからの共同体のアイデンティティ」や「文化」の回復に向かう、とネアンは主張する。言い換えると、ウェールズのような「強制された低開発」を経験した地域は、社会的ないしは経済的な自立や独立を目指すことが事実上不可能になってしまうため、まずは、文化的な面での自立や独立を目指すのだ、ということになるだろう。

ネアンの議論を補足する形で、「強制された低開発」の実際を少し記述してみたい。例えば、16～17世紀における鉱山資源の分布状況を見てみると、リヴァプールにほど近いウェールズ北東部には鉛、石炭、対岸はアイルランドとなる北西部には石炭、西海岸の中部には鉛、南部に広大な炭鉱地帯が存在していたことが分かる⁶⁾。その分布状況に、19世紀中盤の鉄道網⁷⁾を重ね合わせてみると、基本的に、鉱物資源の所在地と、各地の港、そしてイングランドを結ぶ形で鉄道網が形成されたことがよく理解できる。この「断片的で歪んだ」鉄道網は、21世紀初頭のいまでもかなりの程度残存しており、よく非難的となるように、ウェールズ北西部から南ウェールズに移動する場合、じつはイングランドを経由した方が時間的に早い。とはいえ、19世紀の時点で、この鉄道網の「歪み」を矯正し、ウェールズの経済的自立を獲得することは容易なことではなかったことも、想像に難くない。ネアンの論旨に従えば、だからこそ文化ナショナリズムに向かったのだ、ということになるだろう。人口にしても、1801年から1921年にかけて、ウェールズ中部の人口が激減し、北東部と北西部、なかでも、南ウェールズの産業地帯で人口が増加している⁸⁾。この増加をもたらしたのは、中部を中心とする農村地帯からの移住者たち、イングランド、アイルランドからの移民たちであり（後述の

6) Rees (1967, plate 65)

7) Davies (2007, pp. 398-9)

8) Ibid., p. 313.

ジャネット・デイヴィズを参照)、この大規模な「秩序崩壊的移動」^{ディスロケーション}によって、農村共同体の秩序が崩壊し、移動先である産業地帯の共同体が、同じく混乱に満ちた大規模な再編成を経験することになるわけだが、このプロセスの最中に、経済的・社会的な自立をなしとげることがいかに困難であったかは、やはり想像に難くない。

最後の「文化的抑圧」については、ウェールズ語がたどった状況を考えてみるのがもっとも分かりやすいだろう。一般に、ウェールズが本格的な産業革命を経験するのは19世紀の中盤以降と言われているのだが、この時期に、ウェールズ語話者の割合は激減してしまう。歴史家ジョン・デイヴィズによると「1850年にはウェールズの居住者の三分の二がウェールズ語を話していたが……1914年になると、……人口の五分の二しかいなくなった」のだった⁹⁾。産業地域の労働者階級を構成することになる人びとの多くは、既述の通り、その大多数が中部農村地帯からの移住者たちであり、多くがウェールズ語を母語としていたにもかかわらず¹⁰⁾、産業化のプロセスでウェールズ語話者の割合が激減したのだった。

もちろんここで言うウェールズ語とは、念のために補足すると英語の方言のことではなく、男性名詞や女性名詞の区分、「動詞＋主語＋目的語」といった統語法を特徴とする別種の言語のことである。このウェールズ語は、長きにわたり教会において、とりわけ非国教徒（non-conformist）たちが集うチャペルにおいて、決定的な役割を果たしてきたとよく言われるのだが、世代を重ねるにつれて話者数は減少し、20世紀後半にはウェールズ語の死（消滅）への危惧が語られるようになる。とはいえ、多くの論者に指摘されるように、産業革命を経て（割合は減少したとはいえ）なお相当数がウェールズ語話者（さらには英語とのバイリンガル）だったのであり、ウェールズ語をその核として文化的アイデンティティを回復しようという運動が出てくることにさほど不思議はない。1925年には、詩人で政治家のソーnderス・ルイスを

9) Ibid., p. 388.

10) Davies (1993, p. 36)

リーダーとする Plaid Genedlaethol Cymru（プライド・ゲネドライソル・カムリ、The Welsh Nationalist Party）が結成されるに至る。1962年、ルイスはラジオ講演において、ウェールズ語母語話者数の減少が「万一継続したら、21世紀を迎えるあたりで、ウェールズ語は生きた言語としては終焉するだろう」¹¹⁾ というショッキングな主張を展開し、その文化（そして言語）ナショナリストとしての姿勢をあらためて打ち出したのだった。

IV ナショナリズムの文化と社会——「歴史なき民族」の

デヴォリューション 半 独 立

再度確認すると、素描してきたウェールズの文化ナショナリズムは、交通網の「断片性や歪み」あるいは、農村共同体の崩壊といった経済的そして社会的問題と密接に絡みあって形成されたものに他ならない。別な言い方をすると、経済的な問題を経済的な手段で解決できないからこそ、文化が必要になる、ということだ。

ネアンが指摘するように、ウェールズは「自前」の産業を形成しえなかったものであり、鉄鋼業や炭鉱業といった産業は、「外側」から主導されたものでしかなかった。ネアンが続けて言うように、「スコットランドやバスク^{カントリ}地方とことなり」、ウェールズの工場主、鉱山主、炭鉱主といった資本家層は、イングランドからやってくるのが常だった、ということである¹²⁾。ネアンは、スコットランドのナショナリズムが、都市部の資本家層やエリート達が主導するナショナリズムであり、それが文化的ナショナリズムというよりも、むしろ経済的ナショナリズムとでも呼称すべきものであることをほのめかしているが、こういう図式がウェールズでは成り立たなかった、ということでもある。スコットランドやバスクなどとは異なり、「自^{ネイティヴ}前」の資本家層が不在である、という状況にウェールズはあった。したがって、交通網などの歪みや農村共同体の崩壊を解決するための、経済的ナショナリズムを構想

11) Lewis (1962, p. 127) 参照。講演はウェールズ語で行われた。

12) Nairn (1977, p. 209)

するのは困難である。残されているのは、言語や伝統を重視する文化ナショナリズムしかない、というわけだ。

この状況に対する著名な歴史家エリック・ホブズボームによる厳しい診断を、ネアンは引いている。

ウェールズとスコットランドは、ほとんどの点において、かなりの違いがある地^{カントリー}域である。スコットランドは、19世紀の言い回しを借りれば、「歴史的民族 (historic nation)」であり……その反面ウェールズは、典型的な「非歴史的民族・歴史なき民族 (non-historic nation)」である¹³⁾。

「非歴史的民族・歴史なき民族」とは、ヘーゲルを引きつつエンゲルスが用いた悪名高い用語で¹⁴⁾、ここまでの議論に沿って言い換えると、自国民の資本家層が出現せず経済的ナショナリズムに向かうことができない民族、文化ナショナリズムに甘んじるしかない民族、ということである。さらに敷衍すれば、こういう民族は「独立などする能力のない小民族」に過ぎない、ということにもなるだろう。

しかし、歴史はホブズボームによる1966年の審判、つまり、ウェールズには独立など不可能だ、という審判を、少しばかり裏切る方向に進むことになる。冒頭で言及した映画『ウェールズの山』が公開されたのは1995年のことだが、その二年後の1997年、ウェールズで、ある重大な住民投票が実施された。この投票は、ウェールズ議会 (National Assembly for Wales) の設置の是非を問うもので、わずかに6721票という僅差で可決、という結果を迎えたのだった。「保険、教育、職業訓練、地方自治体、社会福祉、住宅、経済開発、農業、林業、漁業、食料品、交通、環境、スポーツ、歴史文化遺産、芸術……UK から下りるウェールズ枠の予算の用途を決定する」幅広い権限が、

13) Qtd. in Nairn (1977, p. 202)

14) この用語の詳細については、良知 (1993) を参照。

ウェールズ議会と政府に委譲された¹⁵⁾。ウェストミンスター（連合王国）の議会や政府に残されているのは、外交や軍事、財政といった決定的に重要ではあるが、範囲からすると限られた権限となった¹⁶⁾。

ウェールズ議会設置という出来事は、「デヴオリューション（devolution）」と呼ばれる流れのなかに位置づけられることが多い。「デヴオリューション」は「地方分権」もしくは「権限割譲」と訳されることが多いが、より強い意味合いを込めて「半独立」という言葉で解されることもある¹⁷⁾。この住民投票の可決と、それに伴う権限割譲の大規模な進展の背景として、先に引用した富田が的確に解説しているように、1990年代の保守党政権下におけるウェールズ政策への不満が昂じたこと、その不満をウェールズ労働党がある意味で利用する形で住民投票を推進したことを指摘できるだろう¹⁸⁾。言い換えると、文化ナショナリズムを推進するプライド・カムリ（ウェールズ党）だけではなく、南ウェールズの労働者階級を伝統的には支持基盤としてきたウェールズ労働党もまた、権限割譲という、ナショナリズムよりの政策と言う他ない政策を支持した、ということになる。

そして、この議会設置と権限委譲という社会的、経済的インパクトをもつ出来事に、文化ナショナリズムがまったく影響を与えなかったと断言するのは、どう考えても無理がある。というよりも、文化ナショナリズム（プライド・カムリ）も、萌芽的ながらも生じている経済的ナショナリズム（労働党）も、相互に影響を与え合った結果、あるいは、相互に変化を及ぼし合ったあった結果、僅差ながらの議会設置と権限委譲が生じたのではないか、と想像し

15) 富田（2007, p. 114）

16) Ibid., p. 114.

17) 河野（2011）。繰り返して確認すると、河野の議論は、産業革命以降のウェールズを「文化」を鍵語として論じた、日本語としてはおそらく最初の論考であり、農村の解体プロセスと産業化プロセスの双方に「労働」という問題系が潜んでいる、つまり、産業化による疎外は、ウェールズの農村と都市の双方に共通していることを指摘した重要な論考でもある。本論のネアン理解はこれに多くを負っているのだが、「バトン」を受けとる本稿がその手がかりをつかみたいのは、産業化とその諸問題の克服という議論それ自体が不可避に抱えてしまう制約の所在であり、本稿最終部でそれに触れる。

18) 富田（2007, pp. 110-113）

てみた方が、より実際の姿に近いのだろう。

V 1983年の英語圏ナショナリズム論——「人工的」なネーション

ネアンのナショナリズム論を下敷きに、ウェールズのナショナリズムの展開プロセスを、ごく大まかに既述してきたわけだが、ここで、ネアンのナショナリズム論に、ヨーロッパの左派知識人には珍しく、ナショナリズムに同情的な側面があることを考えてみた方がよいだろう。もっと踏み込んで言えば、ネアンにはナショナリズムを肯定的に見ている節がある。つまり、ナショナリズムには「ヤヌス」（ネアンの論考の第九章は「近代のヤヌス」と題されている）のような二面性があり、その良い面（経済的な軛からの解放）と、その悪い面（ポピュリズム）を良く見極め、かつ、その矛先が国際主義（例えばヨーロッパ統合）に向かうことがないようにすれば、必ずしも全否定すべきものではない、という含みがネアンにはある。ナショナリズムというのは、経済的ないしは社会的な「非均質的發展 uneven development」がもたらすもの（そしてその一部）であり、その見かけに反して近代的なものなのだけれど、それは、「非均質的發展」（ウェールズであれば低開発、スコットランドや北アイルランドであれば過剰発展）がもたらす矛盾を解消するリソースともなりうる、というのがネアンの立場である、と言ってしまってよさそうである。

さて、このネアンによる1977年刊行のナショナリズム論は、1980年代に英語圏で一気に盛んになるナショナリズム論の先駆的議論である、ともよく言われる。とくに1983年には、今現在に至るまで重要なナショナリズム論が刊行されている¹⁹⁾。まず、文化人類学者ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』、次いで、哲学者・人類学者アーネスト・ゲルナーの『民族とナショナリズム』、歴史学者エリック・ホブズボームとテレンス・レンジャー

19) 1983年のナショナリズム論隆盛については、河野（2006）及び三浦（2006）参照。本稿は両者による、ネーションの（脱）構築性という問題提起への応答でもある。

による『伝統の創造』。いずれも1983年の刊行である。そして、レイモンド・ウィリアムズによる評論「諸民族の文化 (The Culture of Nations)」も同年に公表されている。

もちろんこれは様々な事情が折り重なった偶然という部分も大きいわけだが、興味深いのは、彼らのナショナリズム論に、どうにも無視しがたい共通性がある、ということである。

それは、ネイション（民族）というものが、「人工的 artificial」なものである、という論点だ。これは、ネアンにもある程度共通しているもので、かつ、その上で、ナショナリズムに対する評価が異なってくるのだが、まずは、アンダーソンの議論を取り上げてその共通性を確認しておこう。

アンダーソンは、そのあまりにも（正直なところ過剰に）人口に膾炙した著書において次のように述べる。

……ネイションを次のように定義することにしよう。ネイションとはイメージとして心に描かれた想像の政治的共同体である……。ネイションは想像されたものである。というのは、いかに小さなネイションであろうと、これを構成する人々は、その大多数の同胞を知ること、会うこと、あるいはかれらについて聞くこともなく、それでいてなお、ひとりひとりの心の中には、共同の正^{コミュニオン}餐のイメージが生きているからである²⁰⁾。

表面的な対立はあるのだが、ゲルナーやホブズボームと、アンダーソンのあいだには、どうやら本質的な類似があるのであって、それは、ナショナリズムが、やはり近年の（といっても18世紀後半というヨーロッパであれば産業革命開始時期以降のことだが）ものであり、かつ、（ゲルナーも言うように）「人工物 artefacts」だということである²¹⁾。そしてポイントは、ナショ

20) Anderson (1997, p. 15; 強調は原文)

21) Gellner (2008, p. 7)

ナリズムが、どうやら変化や成長をこれ以上遂げることがなさそうなものだ、というアンダーソンの主張にある。

たとえ現実には不平等と搾取があるにせよ、ネイションは、常に、水平的な深い同志愛として心に思い描かれる²²⁾……。

アンダーソン的な図式に従う限り、ネイションは、例えば、高齢化とか少子化とか、そういう社会的問題を解決するために、相互に結束し合う集団にはなり得ない。それどころか、ひもじさや飢えを生みだすような、社会的な対立（例えば貧富の格差や階級や階層間の対立）を、覆いかくしてしまうものがネイションに他ならない。

言い換えると、ナショナリズムが今後なんらかの変化をとげて、「水平的」ではないものとして、つまり、ネイション内の「不平等や搾取」を解決するようなものになることはない、ということである。さらに言い換えれば、そうした変化や成長の余地のない、構築されきった人工物がナショナリズムだ、ということになるのだろう。

こうしてみると、ネアンと、とくにアンダーソンとの間にある、強調点の違いがはっきりしてこないだろうか。両者とも、ナショナリズムが比較的最近形成されたものである、という点では論を同じくしている。しかし、ナショナリズムの機能に関する解釈で、決定的な相違を見せるのだ。繰り返すと、アンダーソンからすれば、ナショナリズムが国内の「貧富の格差や階級や階層間の対立」を解決することは決してない。その一方でネアンからすると、ナショナリズムそれ自体は、上下の社会的対立を解決することはないだろうけれど、ナショナリズムがその一部であるところのプロセス、すなわち「非均質的發展はひとつの弁証法」なのであって²³⁾、このプロセスが上下の対立を実際に解決する方向に向かわないとは（そして必ず向かうとも）、決して

22) Anderson (1997, p. 16)

23) Nairn (1977, p. 344)

断言できない、ということになる。

VI レイモンド・ウィリアムズのラディカルなネイション論

このネアンの議論に比較的近いのが、最後に検討するレイモンド・ウィリアムズのナショナリズム論である。

「ネイション」は、言葉としては、その起源からすると (radically)、「ネイティヴ」という言葉と結びついている。私たちは、諸処の関係のなかに生まれ落ちるのだが、そうした諸関係は、典型的なかたちでは、ある場所に固定されている。この形態における紐帯は、第一義的なものであり「土地にまつわる (placeable)」ものなのだが、それは、じつに根源的な重要性をもつものであり、また、そうした重要性は、人間がつくりだしたものであり、かつ、自然に生じてきたものである。ただし、そうした形態の紐帯から、近代の国民国家ネイション・ステイトのようなものへの飛躍は、完全に人工的なものである²⁴⁾。

最後の一文は、ゲルナー、ホブズボーム、アンダーソンのそれと共通性をもっている。つまり、ゲルナーの言うような、国家 (ステイト) と民族 (ネイション) の境界を一致させようとする国民国家ネイション・ステイトを重視する行動、信条や指向は、「完全に人工的」なものであるとして、ウィリアムズの批判の対象になる。

ただし決定的に異なるのが前半部分であり、これはややもすると、大きな誤解を招きかねない危うい一節だろう。ウィリアムズは、「場所にまつわる (placeable)」ものを重視する。そしてこの紐帯は、「人間がつくりだしたものであり、かつ、自然に生じてきた」ものだ、と付言する。「場所にまつわる紐帯」というのは、もちろんその大部分は、イマジネーション (想像力、イメージ化のプロセス)²⁵⁾ によって形成されるものだろう。そしてアンダー

24) Williams (1983, p. 191)

25) “imagination” はもちろん通例「想像力」と訳される言葉だが、“-ion” が「プロセス」

ソンは、そうした想像力は自然なものだと通常見なされているが、じつは、人工物に過ぎないのだと批判したのだった。ウィリアムズも、^{ネイション・ステイト}国民国家のナショナリズムが自然を装った人工物である、という点では意見を同じくする。しかし、地理的によりローカルなものである「場所にまつわる紐帯」となると、それを作りだすプロセス、すなわちイメージ化のプロセスは、自然なものであり、かつ、人間の手が加わったものである、という込み入った論を展開することになる。

とはいえ、「想像力」を鍵語として考えると確かにややこしいのだが、少し広く例を探してみると簡単な答えが見つかる。人間が作り、かつ、自然に生じるものとは何か？ 謎かけのようだが、ひとつには、麦とか稲と言った農作物がそれにあたる。

農学者の中尾佐助によると、ムギであれば、粒数の多いパンコムギを栽培するまでには、野生の一粒ムギを二粒ムギと掛け合わせたり、といった、眩暈がしてしまうぐらいの時間（おそらくは何十あるいは何百世代もかかる期間）を費やした試行錯誤の果てに、現在のパンコムギが出来た、というのが実際であるらしい²⁶⁾。今の私たちは、パンコムギの生長を、パンコムギの自然の生長力、そして、パンコムギを生育する人間の力とに分けてしまいがちだが、中尾が指摘するように、前者の自然の生長力というのは、じつは、人間の力が加わってできたものなのである。

そして、こうやって人間が一粒ムギや二粒ムギという野生の作物に働きかけてそれを、いわば人間的なものにしていくとき、それと同時に人間社会の組織も、そうした自然によって変化をこうむることになる。一粒ムギと比べて収穫が大きいのであれば、それを貯蔵してムギが収穫できない時期には別のことをするようになるかもしれない。つまり、自然の力と人間の組織というものは、いわば、相互に浸透し合っているもの、ということなのだろう²⁷⁾。

と「プロセスの産物」を意味する接尾辞であることを踏まえると、「イメージ化のプロセス」もそこに含意されているとも言える。

26) 中尾（1966）

27) この相互浸透のプロセスをウィリアムズが決して「弁証法」とは呼ばないことが、最

もっと生々しい例を出せば、例えば原子力発電は、やはり、自然の力に人間が働きかけ、そこから莫大なエネルギーを取りだすものなのであって、パソコンギと同様に、自然かつ人工的なものと言えそうである。この自然かつ人工的な力は、やはり人間の組織、なかでも、いま問題にしているような、イマジネーション、すなわちイメージ化のプロセスというものに影響を与えずにはおかない。放射性物質の種類によっては、数万年のスパンでその問題が継続する以上、こうした自然かつ人工的な力は、私たちの想像力、イメージ化のプロセスのあり方そのものを、実際には変えつつある、つまり、人工のかつ自然なものにしつつある、と言えないだろうか？

ウィリアムズに戻ろう。「場所にまつわる紐帯 placeable bonding」が、「人間がつくりだしたものであり、かつ、自然に生じてきた」ものだとは彼は主張したのだった。そうした紐帯は、確かに大部分は想像力の産物である。ただし同時に、その想像力そのものが、人間をとりまく自然と、その自然の中に生きる人間との、相互作用のなかでつくり出されており、かつ、その相互作用のあり方こそが場所に固有のものなのである²⁸⁾。ウィリアムズは、こうした場所固有の紐帯こそが、^{ラディカル}本来的なネーションである、と暗に示唆している。

VII 1983年のネーション、そして〈個人〉

ただし、さきに示唆したように、この主張は、場合によってはかなり危険なものである。つまり、この紐帯が場所固有のものではなく、「血縁的」な紐帯の偽装に過ぎないと解されてしまう可能性があるからだ。こうした批判の代表例を、著名なポストコロニアル批評家として知られるポール・ギルロイに見いだすことができる。ギルロイは、長い時間をかけたプロセスの「産

後に触れるように決定的な重要性を帯びてくるのだが、自然と人間との相互作用については、やはりマルクス主義による弁証法理解の蓄積が有益である。三浦（1968）などを参照。

28) 興味深いのは、こうして「想像力」を鍵語としてまとめるとき、それが『アースダイバー』シリーズを書く中沢新一と、ほとんど見分けがつかなくなることである。中沢（2012 p. 336）を参照。ただし中沢には後述の「個人」が顕著なまでに不在なのであり、その意味については別稿にて論じる。

物」としての紐帯というウィリアムズの主張に対し、「本物のイギリス人になるには、一体どれくらいの時間が必要なのか」という修辞疑問を投げかける²⁹⁾——つまり、いくら時間をかけても異人種がその「紐帯」に入り込むことは無理なのではないか、とギルロイは示唆している。この反論には傾聴すべき部分がある。もちろん、ウィリアムズの考えている「紐帯」が「イギリス」とは比較にならないほど小さい共同体（例えば彼の生まれ故郷のブラック・マウンテンズ一帯）を想定してのものである、という重要な論旨をギルロイが顧みていないのも事実だ。しかし、ギルロイの批判が教えてくれることがある。それは、ウィリアムズの想定している時間軸、^{タイムスパン}さらには、知識人もしくは作家の（共同体における）役割というものが、どうやら、ギルロイのそれ、さらにはネアンのそれとも異なっている、ということである。

ネアンの言う「非均質的發展」とその症状としてのナショナリズムという^{フロー}流れが、あくまで産業革命以降のものであることは、彼の議論を追っていくなかで説明した通りである。ネアンの図式のなかでは、ナショナリズムという「ヤヌス」の一面、すなわちポピュリズム的な人種主義は、こうした産業化以降のプロセスのなかで解消されるべきもの、ということになろう。産業化のもたらす諸矛盾を解決する手がかりを提示すべき個人としての知識人——このイメージは、ネアンにも、そしてギルロイにも共有されていると言っ

てよさそうである。

しかし、ウィリアムズの考えている^{フロー}流れ、「場所につまわる紐帯」が醸成されてゆく^{フロー}流れは、その時間軸を大きく異にしている。彼の構想していた「長さ」とは、その死後刊行小説『ブラック・マウンテンズの人びと』を手取る限り、石器時代をその嚆矢とする、数万年規模のスパンなのだった。もちろん、時間軸を長くとれば良いというものではないが、肝心なのは、この数万年を（想像的に）さかのぼる旅路のなかで、ウィリアムズが、ネアンのあるいはギルロイ的な知識人像とはその色合いをかなり異にする知識人像

29) Gilroy (1987, p. 49)

—正確には知識人というよりは共同体内で「突出する個人」とでも命名した方が良さそうな人物像—を見いだしていることである。詳細は稿をあらためて論じるしかないが、ウィリアムズは、例えば石器時代の「突出する個人」を記述するなかで、ネアンあるいはギルロイの知識人（大胆に言い換えれば、近代の諸矛盾の解決を性急に目指すリベラルな個人）と、共同体の人びととのあいだに、深刻な分離が生じる瞬間を描き出している³⁰⁾。諸矛盾をいわば「やり過ごす」人びと。すなわち、ネアンやギルロイ（じつのところウィリアムズ本人にとっても）には解決すべき諸矛盾に見えてしまうものを、諸矛盾などとは呼ばずに日常的な経験とする人びと——彼らこそが、「場所にまつわる紐帯」を途方もなく長い時間をかけていわば発酵させてきたのだとしたら、リベラルな知識人は、それを避けようのない形で見落としてしまうのではないか。

この疑問が正しいとしたら、1977年に口火を切られ1980年代前半に活性化する英語圏ナショナリズム論争の背景にあるのは、ナショナリストと反ナショナリストの対立というよりも、共同体の人びとと、リベラルな知識人とのあいだの深刻な分離ということになる。つまり、「国内的にも国際的にも自由に動ける（nationally and internationally mobile）」力をもつ「^{リベラル}進歩主義者とソーシャリスト」とウィリアムズが呼ぶ諸個人が³¹⁾、ネイションの^{ラディカル}根本的な性質を、すなわち「場所にまつわる紐帯」、人工的かつ自然な絆を、見いだせなくなってしまった結果、ナショナリズムの「人工性」という議論が出てきたのではないか。ナショナリズムが近代の「^{インヴェンション}発明」というよりも、ナショ

30) ウィリアムズの小説『ブラック・マウンテンズの人びと』第一巻中の、「計測者の来訪」を参照（Williams 1989, pp. 151-187）。ここでは、ブラック・マウンテンズ一帯の先住者たち（技術的には旧石器時代）のもとに、新石器時代に属する先進的な観測技術を携えた「計測者（measurer）」が訪れるエピソードが展開するのだが、ウィリアムズの焦点は、「計測者」の有する突出した知識がそのままでは、先住民たちの益とはならず、彼らに亀裂をもたらしかねないものとなる部分に据えられる。ウィリアムズの伝記作家は、本小説の書評で、この「計測者の来訪」という挿話の重要性を示唆している。Smith (1990) 参照。

31) Williams (1983, p. 200)

ナリズムをめぐる議論こそが、1980年代の「進歩主義者とソーシャリスト」が必要とした「^{インヴェンション}発明」だったのではないか——このさらなる疑問を提示して、本論を締めくくりにしたい。

(筆者は関西学院大学商学部准教授)

引用文献

- Anderson, Benedict. (1983). *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso. [＊訳出に際しては『増補 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』(1997) 白石さや・白石隆訳, NTT 出版を一部変更の上使用させていただいた。]
- Davies, Janet. (1993). *The Welsh Language*, University of Wales Press.
- Davies, John. (2007). *A History of Wales*, Rev. ed. Penguin.
- Gellner, Ernest. (2008). *Nations and Nationalism*, 2nd ed. Cornell University Press.
- Gilroy, Paul. (1987). *There Ain't No Black in the Union Jack: The Cultural Politics of Race and Nation*, Routledge.
- Lewis, Saunders. (1962). "Fate of the Language," in Jones, Alun R and Gwyn Thomas ed., *Presenting Saunders Lewis*, University of Wales Press.
- Nairn, Tom. (1977). *The Break-Up of Britain: Crisis and Neo-Nationalism*, NLB.
- Rees, William. (1967). *An Historical Atlas of Wales from Early to Modern Times*, Faber.
- Smith, Dai. (2015). "How Celtic Are We?" *Sunday Future*, BBC Radio 3, 4 Oct. 2015. <<http://www.bbc.co.uk/programmes/b06fld1w>>.
- . (1990). Rev. of *People of the Black Mountains I: The Beginning ...*, by Raymond Williams, *Book News From Wales*, (Spring), p. 7. [WWE/2/1/9/2/18, Raymond Williams Papers, Swansea University]
- Williams, Raymond. (1983) "The Culture of Nations," in Daniel G. Williams, ed. *Who Speaks for Wales*, University of Wales Press.
- . (1989). *People of the Black Mountains I: The Beginning ...*, Chatto and Windus.
- 『ウェールズの山』(2012) デヴィッド・マンガー監督, ワーナー・ホームビデオ。
- 河野真太郎 (2011) 「イギリスの解体—ウェールズ、炭鉱、新自由主義」川端康雄・大貫隆史・河野真太郎・佐藤元状・秦邦生編『愛と戦いのイギリス文化史 1951-2010年』慶應義塾大学出版会。
- (2006) 「ネーション/ナショナリズムと文学」大橋洋一編『現代批評理論のすべて』新書館。
- 富田理恵 (2007) 「連合王国は解体するか?—スコットランドとウェールズへの権限委譲」木畑洋一編著『現代世界とイギリス帝国』ミネルヴァ書房。
- 中尾佐助 (1966) 『栽培植物と農耕の起源』岩波書店。
- 中沢新一 (2012) 「稲荷山アースダイバー」『野生の科学』講談社。

三浦つとむ（1968）『弁証法はどういう科学か』講談社.

三浦玲一（2006）「文学と国民の真実」大橋洋一編『現代批評理論のすべて』新書館.

良知力（1993）『向う岸からの世界史—一つの四八年革命史論』筑摩書房.